

「まりさんこちらこそだ、早速本題に入らせて頂く、一平さんに再三電話入れているのだが通じない」

「私も昨日から、一平の電話グーともスーとも言わない、先生もそうなの無理ないと思う」

署長が不安気に成り行きを見守っている、マキがそーっと入って来た。

高柳校長がまりさん驚かんで下さいと前置きした。

「今朝一平さんと漁港で出会い直ぐ別れました、一平さんは挙動不審とかいつもの一平さんではなかった。そんな訳で油壺のヨットサービス会長、大下さんに電話しました」

「大下さんは私に事細かに説明して来ました」

「ヨットで八丈島に一平は行ったんだ、暗殺阻止は出来たのだろうか」

「まりさんそれは明日だ、今日は暗殺者を探っているのではないか、飛行機は飛ばない東海汽船は欠航、諦め荒れ狂う海をヨットを操り一日前に八丈島に上陸したのはその為だ」

「学生時代一平はヨットに明け暮れていた、島回りヨットレースにも四季を問わず度々出場していた。飛行機も船もダメ、そんな時想いだしたんだヨットをそしてヨットで八丈行を実行したんだ」

まりがそう言い始めた、マキがまりに聞きやる

「大きな船が欠航になる程の天候なのに小さなヨットは大丈夫なの」

「マキちゃん、ピンポン玉を想像して、荒れ狂う海でも木の葉のように大揺れするだけで沈まない、ヨットも上下左右揺れに揺れるが操船をあやまなければ沈むものでない、事実八丈島に着いている」

ふーんと返事するマキなれど曇り顔は晴れない。

不安気味なまりとマキをそのままにし署長は言った、村上捜査課長、こっちに来るんだ。

「課長いいかく聞け、三鷹署は八丈島に行き一平さんと合流し暗殺阻止するんだ」

「しよつ署長それって本庁許可なくて」

「本庁の許可なんぞ要らん、署長の俺が指示するんだ迷うな！」

「一平さんと合流出来るんですか」

「ばかたれ！探すんだ、その位わかんないのか、それと一平さんは拳銃と素手で立ち向かおうとしている、危険大だ。いいか市民に怪我させてはならんぞ」

興奮めいた署長の言に村上捜査課長もタジタジ。高柳校長先生が私も空き時間に探してみますと言う、危険もあり得ます、無理せず気分つけて行動して下さいとまりが言い双方は電話を切った。

「二十人ほど非番を集め二十時三十分発の八丈島行きに乗れ」

回りに詰めていた署員らは非番者らに電話し始める。

「我らの動きはいずれ分るだろうが八丈に着くまでは知れては困る。報道管制を敷くんだ、各社に頼んでくれ」
一平を案じ、いつぶくに詰めていた週刊平成の早乙女浩二、各社に先駆け了解したと署長に言う。

それとあるつたけの送受信機を持って行け、現地に着いたなら全てオンにしとくように、署員はまだ集まらんのか、出港時間までには間はあるが着の身着のままでも構わん早くしろ」

非番者も集まり始めた署長の顔が緩んで来る。

「八丈の桝署長には連絡を取っておく、八丈では車が足りない筈だ漁業組合に連絡し軽トラでも何でもいい借りられるようにしておく」

おおそれからと再び村上捜査課長を呼んだ。

「八丈署は既に警備態勢に入っている、が三鷹署と合同でピース国王暗殺阻止本部を設置するように」
唐突な署長の指示に村上課長は又もや躊躇気味。

「署長、三十人集まりました」

直ちに竹芝栈橋に集結するよう連絡をとったとの声、よっしゃーと署長は膝を叩いた、課長に向きなおり署に戻り

備品を積み込み、棧橋に向かってくれ、村上捜査課長に士気が漂い始めたが……。

「村上捜査課長、何をたじろんでいる、八丈では本部長として指揮をとるんだ」

要約、村上捜査課長は腰が据わったかキツと口を一文にし、署長に親指を立てた、同様に署長も親指を立て、頼んだと返した。

自分も連れてつてとマキは父っ様に哀願する、一般人の順番ではないとそっけなくされた。

「マキちゃんここはお父様に任せときましょう、きつと朗報を持ち返してくれるよ」

まりが言うもマキは誰に挨拶するもなく外に。

道場で座禅を組んでいた爺っ様、村上 一太郎が言った。

「おおーマキ戻ったか、何をしょげこんでいる悔しがるでない旅に出ろ」

放心状態でいたマキは、爺っ様の想定外の言に何の事やらと向き直った。

「学校が無かった時代、旅が唯一の勉強の場であった。世の親御さんは挙って我が子を旅に出した、親元を離れ子ども達は世の中を体験し勉強に勤しんだ。身の振り方、自分で生きる力を学び大きく成長して帰って来た。マキ、旅に行つてこい、大きく成つて戻つてこい」

「爺っ様、旅だの勉強だの成長だのは分らんでもないが自分は？」

「ぼつかもん何がはてな印だ。旅に出る八丈島に行けと言っているんだ」

「でも、父っ様が」

「まだそんな事を言つとるのか、物事の善悪を考慮しマキ流に行動すればいいんだ。この日の為に用意した、この包みを開いて見ろ」

和紙で包まれている、紙紐を解いた。

「爺っ様これは」

と口籠った、浅葱色の道着が現れた。

「マキが動きやすい様に薄手作りな短パン仕様の作りにしといた」

左胸に北野流が入り衿字と背大紋は言わずと知れた丸に上の字。

「この道着を汚してはならんぞ、北野流に恥じない立派な活躍を期待する。さーマキこれを持ち直ちに八丈に行け、それから行くからには帰ってこなければならん、息災でしかも笑顔で帰って来るのがわしからの条件だ」

「爺っ様ありがとうございます、行って来ます」

「着くまでは裕太郎に見つかるでないぞ、帰されてしまう」

「変装は自分の得意とするところ、マキ流で行く任しといて」

じゃー行って来ると道場を出て行った。

平日のせいか橘丸船内は余裕があると言うか空いている、マキからは三鷹署の面々は良く見える、逆を返せば署員からもマキを良く見えるだろう、見つかってしまうかかも知れん、いくら何でもここで降りろとは言わないだろう。だけど見つからない事にこした事はない、そんな事を想いながら気付け薬と称しペットボトルに小分けし持参した焼酎を一口二口、どことなく伝わる心地よい振動に誘われ眠りについた。

間もなく八丈島だ、ここかしこで下船準備か騒めいて来た、村上捜査課長と飯島係長は上陸後を確認するが如き他署員と話している。

「本部長、娘さんは諦めたんでしょか乗船時から探しているんですが見当たらない」

飯島係長は言った。

「俺も探しているんだが見つからん、でもあいつは諦めないだろう、飛行機の手もある」
打ち合わせは済んだのか父っ様等はそんな事を話している。

橘丸は接岸した、さー行くぞ！飯島係長は皆に檄を飛ばした、その異様な光景に他乗船客はあつけにとられた、私服もいるが防弾チョッキに脇下に拳銃を携え警棒が腰の出で立ちだ。

三鷹署員らはターミナルを通過。薄いサングラスを掛け帽子を深々と被り一見地味な女性が村上捜査課長に父つ様、おつはよーと声を掛けた、課長はその声は若しやと振り向いた。

「来っしやったよ」

とマキが、お嬢さんやっぱし来たんだね、僕は諦めないと想っておりましたと飯島係長。

「帰れとは言わん、だが我々の邪魔だけはせんようにそれからマキの乗る車までは手配していない、移動は自分でな、それと親心と言うか無線機が一つ余っているこれを貸そう」

マキは、はいと一返事。

三鷹署一行を八丈島署榊署長が出迎えた。

「新井署長から聞いています、車は軽トラを含め十四台用意できましたお使い下さい」

「有難うございます、早速行動に移ります」

榊署長に礼を言い署員らに打ち合わせ通りと指示する、皆は二人づつ車に乗車しそれぞれに散った。マキは父つ様が乗った本部でもあるワゴン車に行ってらっしやいと手を振り見送る。

本部長、お嬢さんに乗せてやればいいのにと飯島係長は言う。

「娘は一平さんに常日頃鍛え指導されている、妙案があるんだろうあの落ち着いた表情から察しが付く」

運転をかつて出た署員に発進するよう命じた。

あれっ、マキちゃんは乗らないのと榊署長は言った、自分は乗らないよ。マキは榊署長に挨拶しスーツケースを引き摺りながら駐車場の端っこに行く、いたいたとボロジープ脇にいた二人の男に背後から近づき声を掛けた。

「おはよー元氣してる」

男二人は振り向きアツと発する。

旅行者をしかも女性を、島内を案内すると言い無理やり乗せ法外な料金を請求する二人だ。一平と八丈島に
来た時、嫌がる女性を無理やり乗せようとしていた、止めに入ったマキに襲い掛かって来た、それが間違いだった、二人
とも一撃をくらい退散。

「お前等はまだこんな事やってんのか、よさんかい」

マキの言に又もや一撃でもと後ずさりする。

「今日は足蹴りしないよ自分が乗ってあげる、そのかし自分の言いなりに走るんだ」

二人は想定外の成り行きにしばし顔を見合わせた。

「どっちなの乗せるのそれとも」

「あねご、それともをとつたら後が、どうぞお乗りください」

二人はあの一撃を又食らわせられてはと承諾する。

「お代は自分が乗るだけでロハだよ」

「あねご、ガスリン代だけでも」

と恐る恐る声が帰って来た。

「よっしゃー商談成立、今着替える、それから島内観光だ」

「ここは駐車場、着替えるつたつて囲いも無ければ衝立も無い、どこで」

「あんた等は何と言う、否面倒だAとBで呼ぶよ、あっち向いて衝立代わりにしててくれればいい」

マキはスーツケースを開き着替えをはじめた、AとBがチラッと横目で様子を窺う、眩しいTバックと僅かばかりな布
で隠した胸が、脱いだガウチョパンツとブラウスをAとBに投げつけた。

「何見てんのよ、綺麗に畳んでスーツケースにしまつて」

AとBは慣れぬ手つきで疊む、着替え終わったマキの道着バージョンに啞然とする。

「あねご、かつこいいじゃんどこに行きましょうとA」

「まずはガソリンスタンドだどうせ入っていないんでしょ」

「何でもお見通しですねあねごは」

と言いつつエンジンを始動させるがブツブツ音交じり、でガクガクと走り始めた。

「いいか原チャリを見かけたなら気付かれん様につけるんだいいな、でも気になるなこのエンジン」
とマキは給油中に独り言。

満タンだ、これで今日いっぱい走してもガス欠はない。マキはスーパーに行くよう指示した、今日いっぱいの三人分の食料を仕入れた、ついでに一平の顔写真をレジに見せる。

「似てるでもありに似てないでもあるこの人、昨日開店と同じして店に来ましたよ」

「何を購入しましたか」

「大勢で食べるのか五人分ぐらいの食料を買っていきました、でもこの人は誰、島の人では無いようでした」

「ありがたい、レジさんがそうでもありそうでもないこの人を探しに来ました」

「あんた等二人はこちらのお嬢さんとどんな関係、島では親から勘当された不孝者とされているじゃない」

「精神を入れ替えました、まず手始めに自分の手伝いをしてくれます、では又、この写真の人が来たら直ぐここに電話して下さい」

マキは走り書きし電話番号を渡した。

「あねご、ここん所やけにポリ車が多い、なんかあったのかな」

「お前等を取り締まってんじやーないの」

一平は昨日八丈に上陸してからシナリオ通りに辿っていた。

午前中は国王一行が宿泊するペンション大吉丸を見張った、窓から見えるのは警備員らしき人影だけ、目指す人物は見当たらん。

午後は民宿大吉丸に向かう、周回道路から外れた汐間海岸を見下ろす高台にあった。三部屋でこじんまりした民宿だ、ここも借り切っているに違いない、窓を見渡せる茂みに原チャリを止め監視する。

右端の部屋に男女と想われる洗濯物が干してある、狙いが当たったかと腰を据え双眼鏡で窓越しに部屋の中を伺った、レースカーテンで部屋の中が確認できない、夜を待つしかないな。

「国王は明日来島する、それまでに何としてでも来ているとされる寺島加奈を探さねば」

と一平は己に言い聞かせた。

帳の頃一平の黒目が大きく動いた、中央の部屋に明かりが灯った、後姿がぼんやりとレース越しに見える、忘れもしないあの輪郭からして田川健二郎だ、打ち合わせしているのか部屋の中を右に左に歩きながら携帯でやり取りしている模様。

その後右端の部屋で想いもよらぬ光景が。

明かりが付きレースカーテンを開け黒豹がベランダに出てくる、寺島加奈発見の時だ、洗濯物を取り込みガラス戸を閉め分厚いカーテンを引いた。

一平は探しかけて安堵感と共に汗まみれの体になり始める。普段、日に一度は汗を流し必ず着替えている、昨日早朝より風呂に入っていない、塩と汗でべとつく身体を流したい着替えたい。

民宿の近くで汐間温泉の看板を見た、そこに行つて身体を流し着替えよう、動きがあるのは国王一行が来る明日からだと言え十月の夜は寒い、ザックの底に小さく畳み

温泉から上がり元の茂みに戻りにぎりやらパンを食した、八丈島とは言え十月の夜は寒い、ザックの底に小さく畳み

込んだダウンジャケットを取り出し着込んだ。

小鳥の声に誘われ目を覚ました、民宿の窓は厚いカーテンが閉り昨夜と変わりはない、八時を回った頃右端の部屋のカーテンが開かれベランダに黒豹が出て来大きく伸びをする。遅ればせながら中央の部屋も開かれ田川が現れ朝の挨拶か一言二言交わしている。

それっきり動きがない、昼を過ぎても二人は部屋に閉じ籠ったままだ。今頃国王一行は午前のダイビングを終え名代一休庵であしたばうどんを堪能せし頃だ、一平は買いだめのパンを食べた。

ボロジープは不規則音を発しながら南原千畳敷脇の周回道路を走っている。

「おいAとB、人がかくねるのに好都合な場所分らんかい」

「俺達は道路脇や公共施設の駐車場で寝泊まりが多い、そこなら知ってる」

「自分の言っている所はそんなじゃない、人目に付かんところだ」

「道路から少し入れば人目につかん所はいくらでも在る」

「そーか探しようがないな」

昨日に続き受信機からは異常なしの連絡ばかり。

「あねご、あねごは武術の達人は前回で分かっているが一体どなた様、警察の動きが逐一分かる受信機だつて持っている、それにその写真の男何時ぞやのお連れさんだよな、何ゆえ探してんの」

「そーかもいいだろう、自分が何故にここに来、人探しをしているかを話そう」

マキは悉く今迄の事を二人に話した。話し終わるも二人はキョトンとしおどおどし始めた。

「お前等どうしたんだ男だろ確りせい」

マキは喝を入れた。

「あねご、それって殺人いやクーデターとか言うもんやないか、俺にはそらー恐ろしくこれ以上は」

「ばつかたれ！、聞いた以上抜ける事は許さん自分についてくればいいんだ」

「わっわかったよ、でもこれからどうすればいいんだ」

「暗殺阻止に立ち向かおうとしている谷端一平を探すんだ、拳銃に素手で立ち向かおうとしている、早く発見合流し想いとどませ、公安に今件を伝えなければならぬ、いいかAとB、重要な役目だ」

「おれ、何やら恐ろしゅうて」

尻に軽く蹴りし又もや二人に喝を入れた。

父っ様らは依然として一平の動きが掴めん、異常なしの連絡ばかり。

「あねご、警察に連絡し任せたら」

「怖気づいたのか、それが出来るんならとくにやっている、黙って自分の言う通りにせい！」

二人に喝が行き届き始めたかいつしか毅然たる表情に。

三鷹署捜査課の隅では新井署長は受信機と相対していた、進展ない捜査状況に険しい表情をしている、署長の想定内であったが招かざる人物が入って来た。

「署長、お前等は八丈島で何をやっているんだ、三鷹署の人間が溢れ蜂の巣を突ついた状態だ、直ちに引き上げるように指示を出せ」

「例え監察官殿の命令と申してもそれは出来ぬ」

「出来ぬとは何だ監察官にたてつく気か」

「真実と市民の安全の為に八丈に行かした、指示を取り消す事は出来ない」

訓告勧告では済まされないぞと言ひ、刑事課のドアを蹴っ飛ばして出て行った、署長と監察官のやり取りを目の当

りにした待機組は呆氣に取られている。

進展ないまま日暮れが迫った、署長電話ですと女子職員が緊張の面持ちで署長に電話を回した。

「はい、新井です」

「新井君、総監の島原だ私が何を言うとしているか分かるかな」

「分かります、直ちに八丈島から署員を引き上げろでしょ」

「ほっほーそう来たかブブーだな」

「と仰いますと」

「今、ハチがブンブン飛んでいてピース国王一行も落ち着いて観光も出来ない、と外務省から国際問題に発展し兼ねる、蜂の巣を突っついている者どもを直ちに引き上げろと言ってきた、多分不逞の輩と想われる人物だろう、その男が垂れ込んだとみれる」

「それで総監は如何様に対処なされましたか」

「署長も常日頃言っているであろう、市民の安全と真実追及の為に我々はあるんだと、尚も外務省は聞きよった、何の為に所轄が行っているんだと、私は即答した。所轄が国王暗殺情報を掴んだから行ってるんだと言った。ぐーのねも返ってこなかった」

「総監それって」

「私にもそれと無く暗殺めいたことが伝わったいたのは事実だ、だけど確かなる情報が入らぬまま今日になった、情報が何か途中で停まったようだ、三鷹署が動き出したのを聞き国王暗殺が事実と確信した。私独断で指示する、暗殺阻止と市民の安全に全力を尽くしてくれ、拳銃使用も在り得る。明朝には特殊隊専用ヘリ、オオタカと共に五人の特殊隊員を八丈島へ飛ばす」

「総監、有難うございます、全力を尽くします」

すぐさま八丈の本部長にその旨を連絡した。署長は一息ついたが如き受信機を前に大きく深呼吸をする。

こう暗くちゃー探しようもない、マキはAとBに今日は無理だ明日、日の出とともに搜索しよう、何所か夜露を凌げる場所知らんか。

「あねこ、格好の場所がある」

「この近くかそこでいい、そこに行こう」

Bはボロジープを走らせ、入江脇の掘っ立て小屋に案内した。

「嘗て漁を終え漁具を終っておいた小屋だ、大分くたびれてはいるが雨風は凌げる、俺達も良く使っている」

「露天よりましだ、奥にゴザが幾つか畳んであるあれを被れば暖もとれる、一晚厄介になろう」

「だけどあねこ八畳一間だ、ここで三人一緒に寝るんですか」

「そうだ何か不都合でも」

「俺たち二人は構わないがあねこは女です」

「お前等そんな事気にしてんのか自分は構わない、大の字になって寝かせてもらう」

「寝てしまったらおっおれ達は何をしてくすか分かんない」

「好きにしろとは言わん、AとBの良識ある判断に任せる」

「言いマキは大の字になりゴザを一枚被りおやすみなさい。」

「ゴザから出たあの太ももだつて開けた胸だつてどうぞと言っている様だ、B、ちよつかい出してみたらどうだい」

「強烈なる一撃食わされては適わない、そんな事言うAやってみたら」

二人は夜が更けるのも忘れ言葉を変え、手を出すか出すまいかうろつきながら寝いつたマキを伺っている。

水平線がしらじむ頃マキは目を覚ます、AとBは思い思いの格好で鼾かいていた。海岸に出た多少肌寒さを感じる、

浅葱色の道着を脱ぎ砂浜にそっと置く、ランニングを始めた、程なく北野流に準じた動きを声もなく始める、熱の籠った動きだ、宙へ跳び回転、動く度にビッシビッシ或いはヒューッと風を切るような音がする、何時しか汗が一筋二筋、掘っ立て小屋に四つの眼を確認。

「コラ！、お前等に稽古つけてやるパンツ姿になって出てこい」

マキの気迫に慄いたかAとBは戸を背にへたり込んでしまった、マキは三十分汗を流し掘っ立て小屋に戻った、二人は無言でマキを迎える。

「どうした寒いのか強張ったような顔して」

いやつ、どうもそのーとAが口を開いた。

「柔術道北野流の真髓を、序でに自分の裸をみたか」
はい見ましたと口を揃えた。

「見れたかよかったな、もっと近くで見ればよかったじゃん」

「跳ねっ返して顔面ヒットされたら堪ったもんじゃない、ここで充分でした」

受信機からは三鷹署員らが今日の打ち合わせ中か飯島係長が声を張り上げているのが聞こえる。
マキも今日の自分等の予定を定めよう、食料を囲みながら円陣を組んだ。

「国王一行は島内観光だ、見どころを三原山を中心に左回りする、自分等は要所へ先回りしよう、無論警備は厳しいと思う、極力近づき暗殺者等の有無、と同じして一平の所在も」

「あねご、うろついていたら怪しまれない、不審者扱いされない」

「お前ら二人は後ろめたさ多分だから想うんだろ、でも安心してなそんな時は自分に任せな」

ジープの様子を見ると言いAが外に、クークーすれどエンジンは目を覚まさん。

お前またかよとプラグコードをいじり始めた、絶縁部分が露出している、テープで応急処置したが剥がれている、テ-

プはないな、何か代用になる物はと入って来た。

せめて今日一日はもつてくれよなとマキはスツケースを開きこれ丈夫だとTバックを渡した。

「あつあねこれって」

「そうだよ自分の下着だ、丈夫だよ適度に切れれば紐代わりになる」

「あねご、ありがとうジープも幸せなんです、触った事のないあねごのTバック、それを巻き付けるんだ」

「何でもいいけど走れるようにして」

三人は八時を回った頃末吉を抜け、登龍峠に向かった。

一平は藪の中から双眼鏡で民宿を凝視している、動きは昨日の朝と変わり映えしない。

いつ動くんだと独り言が絶えない、そんなイラつきから我に返ったか立ち上がり伸びをし深呼吸する。

十時前にベランダに出てきた、寺島加奈は今までの衣装とは違っている、長い髪はポニーテールで束ね体のラインが出る黒のパンツにシャツ、想わず一平は黒豹が動いたと言った。

田川健二郎も今日は迷彩服のような服装だ、だけどベランダで何の曲かはここからは聞こえんがギターを弾き口遊み始めた、黒豹もヘッドホンでリズムをとっている。

でも一平はそつと自分に言った。

「動くのは午後だ、狙い通りなら決行場所は中之郷の馬路散策路、歴史民俗資料館からふるさと村までは島石畳等の散策路。玉石垣を始め当時の建物や生活、昔の面影を現在に伝える貴重な所だ。ここを国王一行は徒歩で見回る」

と一平はメモを確認した。

国王一行は末吉灯台から八丈島の産業を支えるとも言えるフェニックスロベニーの原木を見、地熱発電所辺りを

移動している。

そこいら一体、警備や報道陣の車でごった返す、マキ等もその中に入っていた。地元警察官数人に取り囲まれた。

「こら！AとB、又旅のお嬢さんを脅し法外な案内料をせしめようとしてるのか」

「おらー達はそんな事していない」

「危害は加えてはいないだろうな」

と警察官が言った。

「お嬢さんの言いなりに走っているだけ、そうしたらこのあり様だ」

八丈署員はこやつら言い逃れしてんなど疑いの眼差し。

いざこざを嗅ぎ付け三鷹署員が二人三人が駆け寄って来た。

「どうなさいましたか」

と八丈署員に声を掛けた。

「こやつらは無理やりジープに乗せ案内料をとろうとしている、そんな常習犯だ」

本部長も来た、マキは帽子とトンボメガネを取り言った。

「父っ様自分だよ」

「うやつ、マキじゃーないか、いい道着つけてんな、島内観光も楽しいだろ、それにしてもどこでこの車見つけたんだ、ハニートラップでも」

「父っ様、自分はスパイではない」

「この男達、女性旅行者を唆し料金をせしめ時には体を奪う、島では鼻つまみ者と称されているが」と八丈署員が本部長に言った。

「そんな事無いよ、隙を見せたって指一本触れてこないし自分には親切そのものです」

もぞもぞしていたBが話し出した、

「父っ様とやら、俺達はお嬢さんの言いなりでお手伝いさせて頂いています、何もしておりません。ましてや手でも出そうもんなら強烈なキックが返って来るだけです」

「マキ、もうキックしたのか犯罪だぞ」

「今回は出しておりません、AとBはさつきも言った通り親切であり、良きナビゲーターであり良き協力者です」

「マキ、親切優しさに騙されているのではないのか、後でどうなっても知らんぞ」

「父っ様とやら今の俺達、皆が想っているような俺達ではない、お嬢さんが言ってた通りです」とBが言った。

「相分ったとでも言っておこう、だけどこの先で通行止めになっている行けない、周回道路に出た交差点にあしたばアイスを販売している、美味と聞いている嗜んでったら」

と言うたかってこれじゃー動きがとれないとマキが父っ様に口尖らす。

「今誘導する、待ってな」

八丈署員が言う、奴等をこのまま行かしたらあのお嬢さんが不幸間違いなしですと言った。

本部長は笑いを浮かべ八丈署員に言った。

「あのお嬢さんには手も足も出せんよ、ジープを上手く誘導してやって下さい」

ポカーンと表情するが誘導を始めた。

クークー音がし、ブツブツ音ながらエンジンは始動しUターンを始めた。

「おい、エンジン大丈夫かよ大分くたびれ音しているが」

本部長が言う。

「昨日からこうなんだ、今日明日は持つと思うじゃん」

マキがダッシュ板を撫でながら言う。

それを聞きつつAは周回道路方向にハンドルをきった。

「本部長さん、あのお方はどなたですか」

と八丈署員が訪ねた。

本部長のお嬢さんですと三鷹署員が言う。

Uターンを誘導していたお巡りさん達は固まりながらも言った。

「いつぞや飛行場駐車場でAとBを一撃のもとに倒した女性がいた、それは本部長のお嬢さんでしたか」

本部長はその位にしろといてと言いその場を離れる。

三人はあしたばアイスをペロリペロリと食している、マキは想い出した様に一平の写真を店員さんに見せる、売り子さんがAとBに意味ありげな視線をむけながら写真を見た。

「お嬢さん申し訳ございません分かりません」

と返事が、ありがとうと言いまきはコーンをバリバリ始める。

マキは走るでもなくジープのシートに座り真綿のような雲を見つめた。

そうだ汗嫌いで風呂好きな一平だ、例え野宿しようが風呂があれば必ず入っている筈だ。

「この辺に風呂屋はないか」

「あねご、もう入るんですか昼を過ぎたばかりと言うのに」

「自分が入るんじゃない、一平は必ず風呂に入っている、この辺にないか」

風呂屋ではなく温泉ならあるよとBが言った。

「その温泉に案内しろ、この辺にいたなら必ず入っている、一平の居所はその近くだ」

この近くに二ヶ所あると言い灯台方向に戻った、廃校になった末吉小学校を左に見て右折し直ぐの所に末吉温泉があつた、マキは写真をフロントに見せたが来てはいないと言う。

すぐさまもう一軒とBに言った、そこから奥に数分行った所に汐間温泉。

「はい、一昨日と昨日入りに見えました、土地の人ではないようでした」

とフロントさんは言う。

「その時の状況、どんな事でも言い分れば教えて下さい」

「一昨日は浴室内までは分かりませんでした、昨日湯温調べに浴室に入りました、その時考え込むかのように沈む夕陽をじーつと見つめていました、その人はひげが大分伸びていました、余計な事と想うもお客様です、脱衣場の鏡脇に髭剃りがございます、お使いはご自由ですと言いました、有難うございますと言いつてもなく夕陽を見ていました」

マキは礼を言いジープに戻った。

「ここに一平は二日続けてきている、この近くに一平は潜んでいる、いやもういないかも知れないが」

「あねこ、あねこは気付かなくなつたと思うがここに来る途中獣道のような所があつた」

「それって」

「バイクで二回も走れば立草が踏まれ獣道の様になる、若しかしたらそこの先に」

「そこは何処だ連れていけ！」

100Mほど戻った左側だった。

「ほら、草は倒れ、ずーつとブッシュの中に続いている」

行ってみようと、マキが頭をとった、50M進んだ所で獣道らしきは途絶える、なーんだとAとBはため息。

「おい、お前等よく見ろ一坪程度草がなぎ倒されている、ここの草の上を何かで引き摺ったように不規則に倒れている、若しやバイクを方向転換したんではないか」

「俺には詳しい事は分かんないが草の上を重い物を引き摺ればこんな風になるんでは」

そこからベランダ側からの建物が良く見えた、あの建物はとマキが指さした。

「居酒屋大吉丸の民宿です、大賀郷にはペンション大吉があり末吉には民宿大吉です、だけどここは三部屋とこじんまりしている」

「ペンション大吉は国王一行の宿泊施設になっている、ここもその関係の宿泊施設ではないのだろうか、温泉で聞いたように二日続けて一平は温泉に入った、この辺に一平はいたんだ、そしてあの民宿で何かを見つけた否見たんだ、昼夜問わずここで観察していたのでは」

「あねご、目先しか見ていない俺達だがその推理当たっているかも」

「褒めたってこれ以上露出しないよ」

あねご！何言ってるんだ、真摯に俺は言ってるんだとBが。

「おおーごめん、でー、ここでも待っていても一平は現れん」

父っ様とやらに見つかりおっ払い食らうかも知れん、だけど国王の先々を探ってみようとAが真顔で言った。

「そうしよう、今頃はいそぎんで昼食中だ、一時半頃から玉石垣を中心に一時間程度散策する、今までは車中や護衛や警察官が人垣を作り射撃するにも邪魔ばかりだった、ここは違う散策路は低くなっている言い換えれば狙いやすい、広場もあり狙撃するにはもってこいだ」

「一平さんはそこだと見込み狙撃者を探し阻止に努めているのでは」

「AもBも言うじゃん、お前等いいとこ突くねー、もう一つ加えるならば一平は現行犯逮捕だ、分ったら行こうか」

玉石垣もあり陣屋やお代官のお屋敷も保存されている、ふるさと村駐車場にジープを止めた。

先客は軽のレンタカーが二台と原チャリ。あつあねご、原チャリ、もしやこの原チャリはとAが。

「そうだ自分も見かけた時そう想っていた」

三人は歩を進め始めた観光客は見当たらない、時折警備の警察官に会う程度、彼等はAとBを疑いの眼差しで見ている。

「間もなく国寶が見学される、近づかないように」

Aが俺達とはいいかけたがマキが制し、はい分かりましたとその場を離れた。砂利道を進み奥まった所に一段と玉石垣が高い所に出た。

「この高さは優に六メートルはあるな」

お前等は詳しいだろう、番度来てたのではとマキが言った。

「ここまで入って来たのは初めてだ」

「親に勘当されたつてここには来られるだろう、否興味ないよな歴史なんて、専ら駐車場で」

「あねこ、もうその話はよしにしてくんない」

突如北から爆音めいた音が、特殊隊のオオタカが飛来した、数回旋回し南に飛び去った。玉石垣が奥に行くに従い低くなり一メートルとなった、玉石垣の奥は亜熱帯特有の木々がずーっと生い茂っている、何する当てなく見ていたBがチョット来てと呼んだ。

「ここを見て、民宿大吉傍で見たと同じような獣道が」

「この段差ではバイクが乗り越えて行くにしては無理がある」

とマキが言々とBが言った。

「人一人が通つても立草はこのようになる」

マキ等が居る地から50メートル先に開けた所があった、左側は崖になってそこから遊歩道が見える、そこに機関銃をセットした寺島加奈と田川健二郎とが相對していた。

その右側に枝が込み入った木々がある、開けた所からはブラインドになっていた。そこに谷端一平は佇み、心優しいジジの表情をしている。

満を期したか一平はルパン三世のテーマの口笛を吹いた。

田川健二郎と寺島加奈は突如の口笛に何事かとその方向に眼をやった、見えぬ口笛に田川が言う。

「だれだ！何者だ」

口笛を吹きつつ田川等の視界に、一平は心優しいジジの表情は崩さない。

お前は誰だ、何しにここに来たんだと田川が言った。

「谷端一平と申します、国王暗殺阻止に来ました」

「お前が谷端一平かよくも今までは邪魔してくれたな、数々と忠告したのによ来たな覚悟合つての事だろう、今日は今までとは違い容赦しない。

一平は口笛吹きつつ僅かづつ悟られんよう機関銃のセット方向に向かう。

「容赦しないと云ったのが聞こえんか」

と言い田川の表情が一段と険しくなった。

尚も近づき機関銃セット位置まで二間ほどに迫った、一平は穏やかに言い始める。

「例え暗殺が成功したとて田川さん、寺島さん、ここは大きなトリカゴです八丈島からは出られない。ましてや国王に同行しているシャルム一等書記官の胸中は分かっている、暗殺後に秘密を知っているあなた方は殺されてしまう。寺島加奈さん、目を覚ますんだ優秀隊員が悪事に加担する事はない」

「黙れ、私の使命だ邪魔すんな」

寺島加奈は吐き捨てるようにそう言ったが一平は本心でないと察した、一平の穏やか口調は尚も言い続けた。

「タツカー大町国王とユンザリア王女は観光誘致と両国親善の為に来日したんだ、八丈島の風土を知りスキューバ

ダイビングを体験し本国に広めようとしている、その人達を」

「黒豹、騙されんな、無駄口言わせんと邪魔者は消してしまおう」

田川が言う、寺島加奈は一瞬怯むもキッと一平を睨んだ。

「騙されているのはあんた達二人だ、暗殺が完了すれば消される」

そーこー言いながら一平は機関銃セット位置に来た、今だとばかりに機関銃を奪いがけ下に放り投げた。

立ち尽くす寺島加奈に業を煮やしたか田川は拳銃を一平に向け一発発射した、至近距離とは言え田川は拳銃には不慣れか、一平の右腕をかすめた。腕を押さえながら尚も言い続ける。

「黒豹これ以上手を汚すな、今市のご両親は小生等の仲間が助け出す手筈になったいる、それから田川、まだ分らないのか役目が終われば必ず消される、パチンコ台が懐かしく想われんか、これ以上悪事はやめよう」

さあー拳銃をよこすんだ、田川に近づき手を差し伸べたその時二発目が発射された、一間半の距離だいくら不慣れでも一平に命中、脇腹を押さえその場に蹲った。

石垣下にいたマキ達にも発射音は聞こえた、運悪く傍には警察官はいない。

マキとAB三人は立草倒れる所を辿りその方向に急いだ。

「おー、お三人さん登場か、命が惜しくないと見えるな」

虚ろな目付きで立ち尽くす寺島加奈と拳銃を構えニヤリとする田川がいた。

「あれっ一平がいない」

「お嬢さんあその草むらに蹲っている」

その方向を見たマキがアッと声をあげ卑怯者、丸腰を打つなんて。

「卑怯も何もあるか、邪魔だからだ」

マキは一平に近づき傷を確認する。

「おっとお嬢さん達近づくてない、あいやーどうせ弾きのお世話になるんだ、いいだろう」

想っていたより出血が激しいとマキが言った。

「A Bどつちでもいいシャツを脱げ傷口に当ててるんだ」

Bはシャツを当てあがつたが出血は収まらない、手で押さえるようにマキが言う、一平の傍から起きざまにカジユマルの枯れ枝を拾い田川の腕めがけ下手投げ、見事拳銃握る手に命中し拳銃は宙を舞う、拳銃をとれとマキの檄が、Aが素早い動きを見せた。

「おめー等、味な真似するじゃーねーか、よーし三人束になってかかってこい」

気丈にふるまっていた寺島加奈は放心状態、その場に座り込んでしまった、それを確認しマキが田川をキツと見開き、言い放った。

「あんたをやるには自分一人で充分だ、Aは拳銃を離すなよ、そんで手出しは無用、すこし離れた所で見てろ、あいやー一平の止血を頼む。Bは寺島加奈と駐車場方向に走りこの旨を父っ様に知らせろ」

「寺島加奈、騙されんな、こやつらの言う事はでたらめだ」

と田川は怒鳴り散らした。

「黒豹さんとやら一平も言っていたでしょう、自分等を信じて下さい。B何やってんだ時間がない早く行きなさい！」

寺島加奈は一平とマキが分ったかBに引っ張られ走り出した。

駐車場に国王一行が到着前にBと寺島加奈は着いた、警察官がBを見て言う。

「こらB、Aは何処だこの女性を誑かしたのかまだ懲りんのか、今度は直ぐは出られんようにしてやる」

「そつそんなじゃないんだ信じてくれ」

八丈署員は二人をガン見しながら言った。

「現行犯逮捕だ、堪忍しろ」

埒あかぬBに変わり徐に寺島加奈が喋った。

「そうではありません、私は行方不明とされている警視庁特殊隊の寺島加奈です。三鷹署の村上捜査課長に至急連絡して下さい」

寺島加奈がそう言う、Bが本部長だ緊急事態発生だすぐに連絡とつてくれと必死。尚も疑いの眼差ししながら本部長を呼び出した。

連絡受けた本部長は二人を確保せしと現場の警察官に指揮を飛ばした。

尚も指揮が飛ぶ、救急車要請、防弾チョッキを着用、直ちにマキのもとに急行し田川健二郎と対峙しろ、拳銃を所持している、心得て対処せしと檄が、Bは現場を案内しろ。

尚も本部長は本国警備隊にこの先に銃撃者がいる、国王一行を直ちに安全な場所に移動されたと告げるんだと八丈署員に言い渡す。

警備隊長とランソン駐日大使、シャルム一等書記官が協議を始めた。

「別にこの先は何もないようだ」

シャルム一等書記官は国王は玉石垣に興味がある是非とも見せてやりたいと言う、が警備隊は日本警察は確かだ直ぐに安全な場所に移動する。

「何かあつてからでは遅い、安全な場所に移動、空港がいいだろう」

とランソン駐日大使も同様に言った。

国王一行は空港へ移動を始めた。

寺島加奈を指揮車に確保した本部長は、合同署員らに告げた。

「私は指揮車で国王一行を追従する」

「いいかA、手出しすんな自分一人で相対す」

マキはそう言ったがAが言い出した。

「そんな事言っただけであれ、大人と子供程の違いがある」

村上水軍の心意気を見せてやる、と道着の帯を締め直した。

「ほっほー、いい度胸してんな面白いじゃーねーか」

と言いながら丸太のような腕がマキの顔面に飛んで来た。空かさずサッと後ろ跳びし仁王立ち。

田川は技はなく力任せだとマキは悟る、左右に一間ほど飛び跳ねる、目で追うも田川は動きがついてこない、横枝に乗り移り背にキック。

田川はウツと発するも動じない。力づくで押さえ逆をとろうと迫ってきた、体勢低くし膝脇を抜ける、田川が攻めマキが交わすが続く。

自信めいた田川であつたが攻めあぐね顔、不敵な笑いし腰に挟んだ七首を取り出した。

「卑怯だ、素手の女一人相手に七首とは」

Aが田川に言う。

「ふん、卑怯もへつたくれもあるもんか、やつつけりゃーいいんだ」

七首を振り回し始めた、これには堪らんマキだが得意の跳びで避ける。

「あねご、これを使え」

Aがスタジイの枯れ枝をマキに放り投げた、受けたマキは応酬する。

技のない田川、七首をむやみやたらと振り回してくる。枝から飛び降りた所に小石が、ウツと怯んだ隙に水平に七首が、左胸辺りの道着と三角ブラが切られる、尚も振り回してくる。

マツマキーと一平の呻き声、その方向にチラッとそれがいけなかった、隙を作ってしまった。田川に首を掴まれ背後に回

られ力任せに締め上げて来た、おまけに七首がマキの首に迫る、身長之差マキの脚は地べたから離れる。あねごととAは狼狽える、マキは気が薄れる、堪え瞑った眼の先に爺っ様が現れた。

（マキ、井の頭の再現やないか、忘れたか北野流の真髓を、相手の力を利用するんだ。相手は大きく力がある、マキ一人がつる下がったって倒れない、苦しいだろうが腕で相手の首を掴み腕の力と腹筋で相手の背後に回れ）

で臉から爺っ様は消えた。

爺っ様ありがとう、田川の首に両腕を回した、齒を食いしばり腹筋し力を込め脚を上方に、マキの突如の動きに絞めつけていた田川の腕が緩んだ、田川の頭を掴みながらバック転のように背後に降りた、すかさず後頭部に一撃、筋肉の塊のような田川だがウツという立ちすくむ、すかさず体制を入れ替えて田川の右腕を天に向い蹴り上げた、七首は宙に舞い上がったマキは回転しながら横っ飛びし受ける。同じして田川がドッサツとその場に倒れ込んだ、マキは七首をよくも一平をと田川に振りかざした。

「あねごとやめろ！、そんな奴殺った所で一平さんも誰も喜びはしねー」

Aが叫んだ。

七首を下したマキは田川のほつぺたにピタピタとあてがい命拾いしたと言い、この七首は自分が預かると鞘に納め腰帯の後ろに挟んだ。

三鷹署員が駆けつけた、Bも戻って来た。

「間もなく救急車が来る一平頑張るんだぞ、自分は元気だし寺島加奈さんに笑顔が戻ったよ」

微かに一平は肯いた。

「マキ聞こえるか聞こえたら返事しろ」

と興奮状態の本部長、あつ、いけねーマキのは受信専用だと言うも話し出した、一方的に話す、聞いてくれと父っ様。

「国王警備隊に経緯を説明しに寺島加奈を引き連れ榊署長と空港貴賓室に向かった。入り口で仁王立ちしている隊長に暗殺計画及び実行犯を話した、警備隊と共に私等も貴賓室に入った。

シャルム一等書記官はここまでかと王女ユンザリアを盾に軽トラに乗り大賀郷方向に逃走、因みに拳銃を持っている、大賀郷から南原千畳敷方面に行くと思われる、私もオオタカと一緒に今から飛び立つ、マキの所からの方が近いだろう向かってくれ、シャルムの逮捕、王女ユンザリア救助に協力してくれ、以上」

でもと言い始めるマキに、お嬢さん、本部長に協力してやって下さい、両国友好の為にとも署員らは口々に。

「小生は頑張る、マキ行け」

と力ないが一平の声、その声に踏ん切りがついた。

「一平、自分も頑張るから一平も頑張るんだ」

と言い、行つて来ると立ち上がった。

「B、救急車が来たら一平と一緒に病院へ行ってくれ、頼んだぞ」

「がつてんだ」

「Aは自分と共にシャルムを追う」

「よっしゃー」

ボロジープに乗り込んだ、走り始めは何時もながらの喘息走行、しかしAは地図に載っていないような細い道を右左に操る、報道管制解除されたかオオタカをトップに報道各社のヘリが右遠方からこつちに来るのが見えた。

白い軽トラが前方右手をより走ってくる、頭を押さえようにもこの走りでは間に合わん、無念ながら一足先に左方向へ走り去った。

「マキ、近づけタイミングを見、前に出る止めるんだ」

オオタカに乗り込んだ本部長が言う。

「御父上様、ご希望に叶えるよう尽くしますが如何せんスピードが」

とAが、マキが隣でオオタカに向かいエンジンを指さしながら無理だのジェスチャー。

いづぶくではまりが気を紛らわすか、ラジオを聞きながら夜の準備を始めていた、ラジオから臨時ニュースが流れる、ピース王国国王暗殺阻止、しかし暗殺グループの一人シャルム一等書記官が王女ユンザリアを人質に逃走中、報道規制が解かれテレビでライブ放送を始めた、アナウンサーは落ち着くも興奮めいた声で伝える。

まりは液晶をつけた、逃走する軽トラックを追うジープが映し出さる、マキが助手席で立ち上がり運転手に指図しているのが窺える。

あれ、どうしたんだろう一平がない、他で自分流に熟してんだろうか、気掛かりながらも準備を続けた。今迄にはない事、突如サイホンを落としてしまう、もしや一平の身に何か。

脈拍を見ていた救急隊員がBに言う。

「いかんせん出血が多すぎた」

救急隊員さんにそれってどういう事とBが聞いた。

「Bさん、ここまでは気力で頑張っていたが出血多量です」

何とかならんもんかとBは救急隊員に迫った。

出来るものなら私もと言うも首を横に振り一平に白布を掛けた、暫く歯を食いしばっていたBだが男泣き。

ドローンがジープと並走を始めた、平成テレビのロゴが確認できる。

マキのジェスチャーが通じたか又もや本部長が一方的にしゃべり出した。

「いいか二人ともよく記憶するんだ、時間もない一回しか言わん、前に出て軽トラを止めろ」

「家庭での父っ様を知っている、よう言い張るな洗濯も食事も満足にできないくせに」

とマキはふてくされている、受信機から聞き慣れぬ声がしてきた。

「マキちゃん私だ、樽沢源三です」

警視庁特殊隊の樽沢隊長だ。

「隊長の樽沢です、いいかマキちゃん本部長は家庭での父上ではない、今は暗殺阻止隊の本部長だ、それが真の村上捜査課長、マキちゃんの父っ様です、言いたい事があれば家庭に帰ってから気の済むまでやって下さい。ここは本部長の指示に従ってくれ、了解したなら腕を頭上でグルグルとAも同様だ」

隊長のテキパキとした指令に二人は腕を回した。

「よっしゃー、ありがとうマキちゃん、本部長に変わる」

「いいかマキ、軽トラの前に出る様もう一度チャレンジしろ」

マキがフロント枠を掴み立ち上った、Aに軽トラの隙を見つけては伝える、出ようとするど幅寄せし発砲もしてくる。

「無理だな、作戦を変更す、実弾はまだ残っている王女に向ける事も想定内、オオタカを右側から近づけシャルム一等書記官を揺さぶる、ヘリへ拳銃を構えた所で特殊隊員が撃ち落とす」

マキ等は腕を回した。

「忘れんな、特殊隊員は一発で撃ち落とす」

言い終わらん内に見事シャルムの拳銃は宙を舞う、次の指示が飛ぶ。

「父っ様いや本部長、何なりと」

「よしその調子だ、撃ち落とした、オオタカはジープの後方やや上を低めで軽トラを追従する、間入れずに二人の隊員が各々後輪を打つ」

「本部長、打つのがずれば転倒もあり得るが」

「心配ご無用、狂い無く同時に打つ、隊長も自信に満ちたVサインをしている」

了解、その後はと本部長には聞こえんがマキはその都度受信機に語っている。

「シヤルム」等書記官は強引に走らせようとするだろう、しかしスピードは出ん、ジープを前に回し何としても軽トラを止めろ」

「止めたら直ちに王女を救い出すんだ、とでも」

「指示が省けたな、その通りだ止まったのを確認したらオオタカは着陸し速やかに合流する、私等が行くまでは王女の安全確保に努めし、Aお前もだ分かったか」

Aはぎこちないながらも腕を回す。

「よしマキ行くぞ」

と毅然とした本部長の声、Aはびくついていたが幾分平静さを取り戻す、二人は追尾しながらその時を待った。オオタカが背後に回り高度を下げた強烈な風圧だ、一発と想われる発射音がし軽トラはガクンとスピードが落ちた、後輪から白煙があがった、両輪パンクし不安定ながらも走り続ける、ホイールが空転気味だ、ゴムの焦げる匂いと火花と白煙。

なおも軽トラは走り続ける、右に左に追い越そうとするジープの邪魔をする。

「マキ、火が出そうだ、早く前に出て止めろ」

切迫気味だが落ち着いた本部長の指示。

いいか自分が合図する、そしたらアクセルを力一杯踏んづけ脇を抜けるんだ、よっしゃーとAが言ったがジープ傷ついちゃう。

「ぼつか言ってんじゃないよ、ボロジープの修理代ぐらいは自分がだしてやる、言われた通りに走らすんだ」

「マキ、火が着いた早く止めよ」

「ほーれ待ちきれず指示が来てしまった、いまだ！右側を抜け」

ボロジープは最後とも言える力で脇を抜け頭を左に振り止めた、軽トラはやや左向きになりながらジープの左フェンダーに当たり止まった、軽トラの右ドアが潰れ塞がれた。

「タンクに火が回り始めた、早く王女を救い出せ！、早く安全な場所に、私達も着陸し直ぐそちに行く想ったより火の回りが早い、爆発も在り得るマキ、A早くしろ」

「あねこ、王女は連れ出した、そっちはそんな奴どうだっていいじゃないか」

「例え悪人でも血が通っている、助けるのが自分等の使命だ」

運悪く当たった時の衝撃だろう、シャルム一等書記官の右足が内張りとはペダルとの間に挟まっている。強引に引っ張れば抜けるようだ、足を抜くんだとシャルムに。

「マキ危険だ離れろ」

と本部長の声、王女を抱えながらAも声をからして離れろと叫ぶ。

「俺は死ぬのが怖い、嫌だ助けてくれ」

とシャルムがマキに懇願する。

「てめーみてーな悪人、死んで詫びを入れろ」

とマキは檄す、があられもない格好しシャルムの足元を確認した。

つま先の方が挟まっている、靴を脱げば脱せられる。

マキは七首を取り出した、見たシャルムはそれで私をやるのか泣き叫ぶ。

「早とちりする出ない、靴にに切り込みを入れる。入れたぞシャルム、いいか自分が左手でかかと部分を押さえる、右手で靴を脱げるように持ち上げる、そうしたら靴を脱ぐように上に持ち上げろ、分かったか」

傷みを堪えているのか悲鳴をあげながらシャルムは靴を脱ごうとしている。マキが又もやあられもない恰好し体制を入れ替えた。

「よし、これなら力が入る、3、2、1で力を入れる、それに合わせて思いつき切り引っこ抜け」

顔をしかめるシャルムの足は抜けた、運転席から左へ尻ずりさせながら助手席に移動させる。

「早くしろ、降りろ爆発する」

シャルムを道路脇へ突き飛ばした、マキが後を追う、大音響が大小二つ、シャルムが道路下に転げ落ちる、少し遅れたマキは爆風に煽られ道路下に飛ばされた。

他社に先駆け近づき映像を送っていた平成テレビのドローン二機、爆風ですっ飛んだ。ヘリ画像に変わる、爆発で見ても無残にばらけ散った軽トラとジープを映し出す、マキは受身すれど爆風に煽られ普段の受身が出来なかった、起き上がってこない。

Aが特殊隊長が本部長がマキと大声あげ近づいて行った、大声に我に返ったか上体を起こす、その場に胡坐をかき近づく皆に右手を挙げた。頭を左右回転させ肢体を確認する、マキ怪我はと銘々に。

「ありごとう、着地した時左腕と頬を打ったが微々たるもの、爆風は勝手が違う十分な受身がとれなかった、ウンザリア王女とシャルムは」

「王女に怪我はなかったがシャルムの脚首が骨折している、今、両脇を抱え隊員が連行するところ、王女は本部車で確保しているがサプライズに動揺気味だ。

おー、普段の王女にもどったようだサイドドアから手を振っているとマキが言った。

パトカー、俄パトカーが続々到着、赤色灯をつけた軽トラの脇を抜けセダンが来た、助手席に榊署長が乗り運転は高柳先生が、後部座席からBが降り飛んで来た。

「あっあっあねごー」

「Bどうした落ち着いて、自分はほれこの通り元気だよ」

「いっー平殿が」

「だから一平がどうしたのよ」

「無念です」

「図体ばかり大きくてはつきりしゃべんなさい」

「一平殿が他界されました、出血が酷く救急車の中で」

それを聞いたマキは固まった。そんなマキに顔がくちやくちやになりながらもBが話し始める。

「これ、一平さんがしっかりと握っていました」

鳥の写真がはめ込まれたペンダントをマキに渡す、事情が分かったか気丈にも唇を噛みしめる。

「この鳥は自分が初めて撮ったアオゲラです、蓋つきペンダントにし開けてはいけませんと渡しました、でも可笑しい開けた形跡がある、ここに挟じ開けた様な痕が、中がどうなっているか開けてみよう」

「あねご、あつしが手伝いましょう」

Bが爪をたて力を込め開いた。

「写真と文が入っています」

「それ、自分が入れたものです、一平とのツーショットと一平に当てた願い事が入っている」

「小さく畳んだ紙が二枚入っている、これ等があねごの願い事」

「否、一枚しか入れなかった見せてみな、ほんに二枚はいつている」

一枚はマキが書いた「生まれ変わる事が出来た自分と結婚して」、もう一枚はと小さく畳んであったのを広げた、一平からの返事だ、「開いてはダメと言われていたが開けてしまった。生まれ変わり、まりより先に出会う事が出来たら結婚しよう。一平」

「ありがとう、まりさんより先に出会う事は出来るよね。一平が暴いた悪の数々、解決したよゆつくり休んで」
沈みゆく夕陽に向かいなおもマキは言う。

「一平が突き止めた真実、夕陽は見ていた」

気丈に振舞っていたマキだが頬に一筋二筋熱いものが夕陽に照らされている。

マキちゃんは高柳先生がAとBと一緒に連れて帰ります、暫くそつとしときましようと思署長が本部長に言った。帳の頃、高柳先生はマキの肩にそつと手をあてがい、車に乗せた。

「先生、俺達は親に詫び入れし戻る、俺はロベ作りにBは親の漁船に乗る」

おーそうか、親御さんはどんなにその言葉を待っていたことか、喜ぶぞーと高柳先生。

「あねごにあっちゃー敵わん、心を入れ替えた」

「ジープもう、ああなっちゃー使えんなー」

樺署長がAとBに問いした。

「あねごが買ってくれると言つとつたが、俺達は働けばすぐ買える」

「ほほーいい想いつきが出てきたな」

「みんなあねごのおかげだ、東京に足向ける事は出来ない」

「AとB、くすぐつたい事言うなー、もう終わりにしよう」

マキが悲しみをこらえながらもAとBに笑顔を返した。俺達を叱りつけるあねごもいいけどその笑顔は宝だ、二人はマキとハイタッチした。

いづぶくの支度中、着物姿でテレビを見ていたまりは液晶に話しかけた。

「マキちゃんご苦労様でした、有難うございました一平もこれで憂かれます。一平、狂奔しきり疲れたでしょうゆっくり休んで下さい。残してくれた子ども達と孫達で一平の分を入れて楽しく過ごしていきます。」

言い終わるとまりはハツとする、二階に上がり神棚に二令二拍手一札に願の字書かれた和紙包みを下した。

「一平、ごめん開けるよ」

包みを開いた、紙片とメモリカードが出てきた、和紙には「まり、開いてしまったか開いてしまったなら仕方ない、生まれ変わる事が出来、レミーマルタンが置いてある店で出会えたら結婚しよう。このメモリーカードを直ちに三鷹署の新井清十郎署長に渡すんだ、後は署長の指示に従う事。一平」

と記されている。

まりは着物、肌じばんを脱ぎ捨て破れG—ンズを履きタータンチェックのシャツにGジャンひっかけハーレーダビッドソンに跨った。

空港待合所では警備隊と両所轄に守られ国王タツカー大町とユンザリア王女は固く抱き合っていた。

「本部長を始め大勢の警察官の方のご活躍で娘もこの通り元氣に戻った、八丈島ではユウゼンチョウウオオにも会う事が出来ました有難うございます、不慮と言うか良からぬ者達の仕業で予定を切り詰める事となってしまった。臨時便が間もなく到着する、羽田に行き特別機で今夜帰国の途に就きます。

重ね重ねお礼申し上げます、有難うございます」

タツカー大町は涙を浮かべ話している。尚も国王は続けた。

「ピース王国と日本の友情は永遠となりました、私どもピースからも多くの観光客が海に山に古都京都に八丈島にと日本に参ります、日本からも海洋国、ピースに来て頂く事をお願いします、海は何処までも碧く魚介類は最高ですお待ちしております」

どこからともなく拍手が起きた。

「国王は続ける、今日娘を無事に取り戻してくれたお礼として、携わってくれた警察官全員をピース王国に招かさせて頂きます、ご異存はございませんね」

盛大な拍手が興った。ウンザリア王女が手を挙げ話出した。

「あの何とか言う武道家の女の人、危険なものともせず立ち向かい私を助けてくれたあの人、是非ともご招待したい」

満場一致の拍手。

帰ったよとマキは道場で座禅を組んでいる爺っ様に声を掛けた。

「大分ボロついでいる様だが息災で笑顔で何よりじゃー、それで大きく成ったな」

「元気に笑顔で帰って来るのを条件に行かせてくれた、そのようにしたよ」

「ほつほーそうだったか忘れとつた、だがマキそれはここまで、これからはマキの好きになさい」

一平がと言つて爺っ様の胸元に飛びつき大泣きを始めた。

三鷹署捜査課の一室で新井署長は高輪署の大泉警部補、松宮刑事と府中署稲垣巡查長と相対している。大泉警部補は頻りと署長に言う

「一平さん、何でわしに声を掛け連れて行ってくれなんだ」

聞き手の署長は返す言葉なく大さんを見つめていた、徐に署長が言い始めた。

「大さんに私はどう声かけたらいいか迷っているんだ、だけど大さん聞いてくれ、一平さんは自分の一人の手柄にしようと思つていのではない。今は一市民、捜査中は多くの人達に協力をして頂き着実に真実を求めていた、途中任意同行や事情聴取も考えていただろう、が本庁は事の成り行きで国王暗殺を掴んでいない。協力している警察官に任意同行等を願ひ聴取は簡単、だがリスクはそれ以上に多い、と一平さんは考慮していた。想いついたのがマトリ方式だった、動かぬ証拠を掴み皆にリスクをかけず一人で乗り込みしよう、そう私は想う大さん、一平さんを攻めないで下さい」

新井署長が言い終わるとまりが咳き込んで捜査課に入った。

「お奥さん、この度はまことに」

と言いだしたが署長は声をつまらせてしまった。

「署長さん私は元刑事の妻です覚悟はできていました、それよりも一平がこのメモリカードを署長に渡してくれと締つてありました、開いてみて下さい」

PCにセットし開いた。署長の顔がみるみる強ばる。

「奥さん、これは偉い事実が書かれている、目黒と白金のマンションそれにピース大使館の三か所を直ぐガサ入れする」署長は署員を招集した、大さんもガキさんも可能ならば同行してくれ、拳銃も使用もあり得る危険だ、まりさんは待機して吉報を待って下さい、とテキパキと指示を出した。

「目黒のマンションには寺島加奈の両親が軟禁されている様だ、大使館は書記官補佐の白家秀忠の身柄拘束と最上階の官舎搜索、ここは外務省職員に同行して頂く、白金のマンションは現金搜索が重点だ、大さん、ガキさんは目黒か大使館どちらでもいい、わしは白金のマンションに行く」

其々パトカーに分乗して出動した。

目黒部隊から一報が入る。

「室内には誰一人いない」

「了解、あるとされている現金探しに数人残し後は大使館と白金に向かってくれ」

署長、了解しましたとガキさんが答えた。

大使館受付で捜査及び書記官補佐、白家の身柄拘束の旨を伝える、ここはピース王国です日本の警察は入れません等々押し問答が続く。

外務省参与が到着、本国からの捜査許可書と警視総監名の入った搜索令状を見せた、参与は間入れず大さん等に突入せよと告げる。

総勢二十名になった捜査員は一斉に館内に入った。大さんは捜査員と共に迷わず補佐官白家秀忠の部屋に、白

家はディスクで目を閉じ腕組みをしていた、ご同行願いますの声に観念していたのか素直にはいと返事する、引き出しの書類等を段ボールに詰め運び出し始めた。白家補佐官の身柄拘束を署長に伝えた。

大使館専用駐車場でモスグリーンのBMW発見、ナンバーから寺島加奈所有車で奥多摩で一平達に発砲して来た車だ、フロント部分が不規則な傷がついている。最上階組は白家補佐官室から書類を運び出した、寺島加奈の部屋は女性の部屋とは思えん様な殺風景だ、しかしレディーガガブランドの香水の香りが仄かにする、台所に今市の両親だろう写真が貼ってある。

白金のマンション、情報屋田川健二郎のベランダから明かりが付いているのが見える。

「よし寺島ご夫妻はここで軟禁されている、間違いなし突入するぞ」

合流したガキさんが言う。

「私が宅急便を装いピボンします」

お願いすると署長。

「相手は拳銃所持も想定できる、が打ち返しは慎重に、ではガキさんお願いする」

ピボン、どちらさんと返事が返った。

「宅急便です、お届け物です」

「今開ける、待て」

ガシャッと音がしドアが開くと同時に捜査員二人が入った。

「何だお前等、何しに来やがった」

奥から男二人が現れる、計三人だ。

「お前等に用はねー出て行ってくれ」

「そつちに用は無くてもこつちには大ありだ」

と署長が言う、捜査令状を見せガサ入れを告げた。

そんなもの俺達には通用せん帰ってくれ、チンピラ風が吐きつてるように言った。

「素直に従えば何もせん、そうでなければ一平さんをそんで俺達のアイドルをあんな不様な恰好させて、今日の俺は怒りが溜っている容赦せんぞ」

ガキさんが言い終わらん内に背後の一人が突っ掛って来た。

一本背負いでサイドボードに叩きつけた、続いては床に思いつ切り腰投げ、残る一人もドアに思いつ切り投げ飛ばす、あつけなく三人は料理された、署員らに取り押さえられ部屋外に。

寺島さん夫婦発見が聞こえた、我々が入って来た時さるぐつわされクローゼットに押し込められていた。

「後は現ナマだ開く所は全部開ける」

と署長は指示する。絨毯までひっぱいた、天井は一部を外し確認。

「出てはこない、もう一ヶ所あるここは一先ず引き上げよう、そいつらは今宵は署に泊まってもらおうとするか」

三鷹署に戻り一息入れる、皆の達成感に満ちた表情を確認し私、家に戻りますとまりが署長に言う。

「明日、一平殿のシナリオは最終章を向かえます待つて下さい」
まりはまだ何かと言いかけた。

「それは明日朝分かります」

と署長、はいと返事しまりは出て行った、一時間後村上捜査課長を始め八丈島隊が帰って来た。やーご苦労様でしたと署長は労を掛ける、はいと返事はしたが皆、心痛な表情で報告書作成を始める。

「なあーマキ、涙も出尽くしたろ、それに疲れている風呂に入って早く休め、捜査員らは休む暇なく書類作りに懸命だ、明日朝、おにぎりを作り届けてやっては」

と爺っ様、同じしてまりから電話が入った。

「マキちゃん、お帰りなさい活躍テレビで見えていました、元気してる。私は今、三鷹署から戻ったところ、お父様を始め皆報告書作りで眠る暇、食事摂る間もないと思う、明日朝食事を届けようと想っているのマキちゃんも手伝って」

「はい、爺っ様にも今言われましたそうします、それよりまりさん」

「マキちゃん分かつている、今はそこまでにしてこうねお願い、じゃー明日朝、署でね」

捜査員は皆想い想いの格好で休息している。

ピース王国クーデター未然に防ぐの白抜き文字の平成新聞が眼につく、誰が揃えたか捜査課長のディスクには一平の写真とキク花それにレミーマルタンが。

署長室で巻和紙に所長が筆ペンをはしらせた。警視総監島原智也殿 三鷹署長 新井清十郎と表に書き添え制服の内ポケットに忍ばせた。一階の事務方に歩を進める、女性署員がカウンター越しで業務を熟している。

「ご苦労さん、この文を本庁便に入れてくれ」

と声をかけた、はいと清らかな事務方の声が響く。

「いつも元気やなー、所で何と言ったつけかな交番勤務のあの好青年、上手くやってやるやろな、結婚はいつや」
事務方は微かに頬を赤らめた、そう言っ署長は皆に声をかけ労うも日課の一つだった。

その頃吉祥寺南町の監察官の家で、武蔵野署員は岡村班長を中心に半円を描くように床に座っていた。班長は皆に缶コーヒーを配った、昨日から食事もとらず一睡もせず家宅捜査、皆は疲れ切っていると岡村班長が言い始めた。

「缶コーヒーだけ飲んでくれ、俺も疲れている皆はそれ以上だろう。この先どのくらいかかるかは不明だが、かつての名刑事谷端一平さんが睨んだんだ、必ず現ナマはある、探し出してくれ」

その言に疲れている署員らは岡村班長をキツと見つめた、そして任せと置けとばかりに皆がオッス。

岡村班長は付け加えた。

「十五分間だが休んでくれ、次は持ち場を変え眼の違った所で捜査するように」
ちよつと岡村班長は田島巡査長を呼んだ。

「巡査長は観賞魚を飼育していると聞いている、あの水槽の中にいるのは何と言う種類かな」
疏金に額のこつこつしているのはオランダシシガシラですと答えた。

「こうして見ていると癒しを感じる」

と岡村班長、田島巡査長は班長に言い始めた。

「僕の友達に金魚を見ていると落ち着く、と共に明日が良く見えてくるようになるという」
わしもその一人かなと巡査長に言った。

「うー、でもなんだか変だなこの底砂を見て下さい、ここだけ色が違っている、班長この底砂を見て下さい」

「言われてみればそうだな、ここだけ砂が真新しいような色をしている、巡査長これはどうした事かな」

皆も集まって来た。

「ここだけ砂をかき回したようです、表面にあった苔色した砂をかき回す事によつて入れ替わった、手を加えなければこのような事にはならない。何らかの意味でこの部分だけを弄ったと想われます」

この部分に何かそんなに大きなものではないが入れた、とか隠したとかは考えられるかなと班長が言った。

「あり得ます」

と田島巡査長は返事した。よし、では砂を調べてみよう、巡査長頼むと再び班長が言った。水槽よりLEDライトとガラス蓋を外し金魚を刺激さんようそーと手を入れ底砂に。捜査員らは集まり固唾をのんで見守る。箱のような何かあると田島巡査長が言う。

「よし出してみてくれ」

小さなタッパーに入った鍵が出て来た、班長の顔色が変わる。鑑識、これは何のカギだと翳した。

「ロッカーか机のカギだと想われます」

水槽の中に置くと言うか隠してあった、いわくつきだ何かある、部屋中の鍵穴に合うか試してみろ、本庁の監察官の部屋はどうだろう、事務が来ている時間だ電話入れロッカーはどうなっているか確認しろ！、更に班長の指示が飛ぶ。

吉祥寺駅のJRと井の頭線に画像を送りコインロッカーのカギか確認するんだ。

監察官室の事務方はロッカーは五つあるが何時も鍵は使っていませんと連絡が入った、家中の鍵穴に試してみたが不一致と鑑識が言う、では何処のだろう、駅はどうなった返事は来ないか。

岡村班長のガラケイが鳴った、井の頭線改札口のコインロッカーのカギと酷似している、至急持って来て下さいと言う。よし、田島巡查長と誰でもいい後一人連れていけ、鍵を持って吉祥寺駅井の頭線改札前へ行ってくれ、後の者は引き続き家宅捜査に専念しろ。

搜索を始めた岡村班長は独り言を始めた。憶を超える現ナマを駅ロッカーに保管するだろうか、俺ならやらないな、そうするとどこだろうか。貸金庫もあり得るが仲間のところだろうか、でも仲間は皆捕まった、どこだどこだろう。

そんな独り言が聞こえたか煤けた顔して天井から降り来た捜査員が言った、班長、駅ロッカーです。

「今の監察官、相谷茂樹の信頼できる人物は本人を於いて他にはいない。切羽詰まってしまった今日、素早く移動でき安全な保管場所は駅ロッカー以外にない。班長、私の感です現ナマは駅ロッカーです」

三原捜査員は上司に控えめなれと言った、駅ロッカー付近の防犯カメラの確認作業も必要ですと付け加えた、岡村班長はありがとう、そうしようと大きく肯く。

三鷹署の玄関で庁舎警備官が凜々しく立哨している。新井署長と村上捜査課長が出てきた、朝とは言え梅雨が明けた今日、日差し強くおまけに蒸し暑さを感じず、ご苦労さんと二人は庁舎警備管を労らった。

「署長、未だ武蔵野署から連絡が入っていない、応援に行きましようか」

と村上捜査課長は言うも武蔵野署は必ず探し出す、お任せしとこうよと署長。

一平殿の尽力で国王暗殺は防げた、国際親善にも一役かい真相究明も出来た、本庁に提出書類も山ほどあるが一段落、二人は署外の空気を吸いに出て来た。

大通りから玄関へは半円を描くように縁石で縁取られた道路が出来ている、中心には植え込みがある。

眩いばかりに磨かれたハーレーがカウンターを効かせながら玄関前に、庁舎警察官はここに止めてはならぬ、赤いライダースーツに赤テブクロ、ブーツに黒の革ジャンのいでたち、背には大きなリュックを背負っている。

「捜査課に行きたい場所は」

「ここには止めてはならぬと言っただろ、それに背のリュックは何だ、中身を拝見したい」

庁舎警備官は警備杖を構える。

「捜査課に朝食を届けに来たとか言っているが爆薬等が入っているのでは」

ライダーは女性のようなだ。

そんなやり取りを見ていた署長と村上捜査課長は玄関方向に歩を進め始める、ライダーはサイドステップを出し右足をピット伸ばしながらハーレーから降りる、降りざまにフルフェイスを外した、今では珍しい黒髪がさつと現れ胸元辺りまで下がる、庁舎警備官は一瞬たじろんだ。

それよりも慌てたのは署長と村上捜査課長、ライダーは一平殿の奥方まりだ。

「ろくさつば寝てないだろうし腹も減っているだろう、握り飯をお持ちしました」

とまりは言う、署長は庁舎警備官にハーレーを所定の場所へ移動しておくように申し送りし村上捜査課長と三人で署内へ。

捜査課の面々は皆それぞれに休息している、不意に署長が現れたもだから堪ったもんじゃない、椅子からずっこける

者も出る始末、それよりも驚いたのは黒皮ジャン、赤のライダーズーツに身を固め均整の取れた女性に皆は眼をパチクリ。

村上捜査課長がまりに言った。

「暑いでしょう、皮ジャンお脱ぎになさったら」

「はい遠慮なくと言いつつ脱いだ」

一同、赤いボデイスーツ否ライダーズーツに声なき声だ。

こちらは一平殿の奥方まりさんですと署長が告げた。

又声なき声。当然だ、まりさんと言えば起用に髪の毛を結い九谷焼の金指に和服で刑事のたまり場、コーヒーショップを営んでいるまりさんしか知つたらん、今度は捜査課長が言った。

「まりさんは皆さんがお腹を空かしているでしょうと握り飯を届けてくださった」

まりが口を挟んだ。

「皆さん、お疲れでしょうお腹すいているでしょう、作ってきましたよ食べて、それと昨夜慌ててヌカ床に入れたキュウリとナスとカブです一緒にどうぞ」

と言いながら、大谷翔平さんの写真とマウンテンバイクのミニチュアを一平の隣に置いた。マキが遅くなっちゃったと大荷物で入って来た、のりとりえも入って来る、村上捜査課長が慌てた。

「マキ、誰に断りここに入ってきたんだ」

「警備杖持ったお巡りさんがどうぞと言ってくれたよ」

まーいいじゃないかと署長が制した、まりがマキ等をホローする。

「私だけでは足りない、作って来てつて、それとカップみそ汁を買って来てとお願いしました」
察したか村上捜査課長は湯を沸かし全員が食べられように机を並べ返るよー指示する。

山ほどあった握り飯が瞬く間に低くなる、捜査員皆満腹感だがどこか浮かぬ顔ののり、が皆にお茶を渡すのを確認するとやおらまりが立ち上がった。

「一平も本望と想っています、刑事魂で言うかな常日頃市民の安全と安心そして真実と前向きに日々過ごしていました、そつと締っていたが誰にも止められない刑事魂に火が付いてしまった。

大勢の方にも手助けを頂きましたが自らの足で調べ上げ、事件は解決はこの上ないと想っております、一平の死は誰の責任でもない」

のりにそつと顔を向けた 小さいが肯きが確認できた。

「又いつぶくに来てねレミーマルタンは置いてないけどコーヒーならいくらでも在ります、今迄どうり来てねそして唄って下さい」

くしゃくしゃな表情になりながら、又もやのりはこっくりする。

まりは皆に向き直った。

「一平が残してくれた子どもと孫たちで一平の分を入れ楽しく過ごして参ります、皆様はこれからも刑事畑で多いにご活躍して下さい」

署長は気丈に話しながらも隠そうとするまりの頬に一筋の熱いものを見た。

「マキに向かい私は一平が生まれ変わる事が出来たなら又一緒になります」

自分の方が先とマキが言いかけた時、父っ様がマキの肩にそつと手を宛がえた。

「あつマキさん これなら譲ってもいいよ、あのサイドカー」

「サイドカー乗ったのは横のパッセンジャーシートだけ、運転は無理よ」

「それないよ、一平にライディングを教えたの私よ、マキちゃんならいとも簡単です」
もじもじしながらもマキはまりにいった。

「まりさん、頂きます教えて、ライダーマキ誕生に協力して」

「商談成立だね、それと品書きに加えようと想っているの一平スペシャルを、今迄通り皆揃っていつぶくに来てね」
そんな時、武蔵野署岡村班長から新井署長に電話が入った。

「井の頭線吉祥寺駅、コインロッカーから一億二千万円と万札数十枚が出て来ました」

吉祥寺駅とは自宅ではなかったのかと新井署長が言った。

「はい、田島巡査長の趣味と感で水槽の中から駅ロッカーのカギを見つけました。30cm大の包みを中心に探していましたが時間だけが無暗に過ぎるだけでした、この鍵を見つけた時は皆、子どもの様に燥いじゃいました、因みに防犯カメラに相谷監察官が出し入れるところが記録されています」

ありがたい、ご苦労様と言い新井署長は電話を切った。

まりは現ナマ発見を聞き終えると言い始める。

「特殊隊員寺島加奈、彼女は親を人質に捕らわれた、殺人補助、偽造パスポート使用、拳銃使用と犯行は事実、だが奥多摩で一平とマキちゃんを殺れるのに殺らなかったのも事実、署長さん寛大なる処置をお願いします。一平を引き取らねばならない葬儀の打ち合わせもあります、これで失礼します」

署長も皆も無言で肯き見送った。

相谷監察官の乗った黒塗りの車が入って来る、と同じしてハーレーが駐車場より出て三回リズムカルにカウンタリングし大道りに消えた。

相谷監察官は半ば怒り顔で庁舎警備管に言い放った。

「今のは女ではないか何だあの乗り方は、あーゆーのがいるから交通事故が減らん、どうせスピード違反でもしご容赦下さいと来たんだろう、勘弁してならんぞ」

庁舎警備管は返す言葉なく無言。

署長は居るかと言いつつ署内へ、署長室に顔を出すもおらない、ではと思い刑事課にやって来た。衣服も乱れ乱雑な刑事部屋に相谷監察官は怒り心頭で言い放った。

「何だこのざまはこれだから国王父娘を拳銃まで使用して、恐怖に慄かせ危険にさらし市民をも犠牲にしたんだ、八丈に行けなど所轄へ指示など本庁はもとより誰も出しておらん」

とまぐし立てた、それに朝からなんだ宴会か、それにしてもこのコンパニオン達はなんだ、顔ひん剥けているじゃねーか、もつとましなの呼べんのか、マキがこの野郎と握り拳を作ったが父っ様がむんずと腕を押さえた。

署長は毅然と相谷監察官に向き直る。

「仰りたいのはそれだけですかまだあるのでは」

その言にムツとし相谷監察官は想い出した様に言った。

「あんたは後八か月で定年だ、今回でそれも不意になってしまった」

「相谷監察官、私は市民の安全安心と真実追及の為に警察官になった、金や出世の為に警察官になったのではない」

と署長は言い、村上捜査課長に向き直りこの男に手錠を掛けろと言った。

皆がキョトンとする、無理ない、警視庁の監察官にいくら署長であっても手錠を掛けろとは、相谷監察官は一生の侮辱だと言わんばかりだ。

「貴様、何で監察官に手錠とは、定年を不意にしたはらいせか」

「相谷監察官殿、一平殿は全てお見通しです」

「死んだ人間に何が分かる」

「浅間山と宿舎でのピース王国職員殺人事件を闇に葬り、八丈島も同様、国王父娘の暗殺計画に加担、一等書記官からの謝礼と称し多額の現金の授受」

あいつらを連れて来いと署長は言う。

情報屋田川と寺島加奈、室井禎一にケンとアキが入って来た。

「こ奴等は誰だ」

「知らんと言わさんぞ、それに吉祥寺駅ロッカーから一億二千数百万円が出てきた」

「そんなに隠し持っていたのか、俺達にははした金しかよこさんのに、危ない目にも合わせてこのブタやろう」

と田川が言った。

遅れて寺島加奈が相谷監察官にpigsと吐き捨てた。

「こいつらは何だ監察官を侮辱するのか、それに今言ったカタカナ語は何だ」

「ブタ野郎と言ったんだ」

とマキが、どこからともなくくすくす笑い。

「村上捜査課長、早く手錠を掛けろ、本庁から迎えに来るまでトリカゴ否ブタバコの方が適してんな、ブタバコにぶち込んでおけ」

相谷監察官の表情が硬くなり証拠を見せろと凄み弁護士を呼べと叫ぶ、

「こちらの女性方と三鷹署員だけで弁護士はここにはおらん」

と署長は軽くあしらった、両腕を抱えられ室外に出ようとするも足搔く、早くしよつ引け、久々の署長節が炸裂す。

キザ監察官を連れ出し落ち着くと副署長を捜査課に呼び皆にしゃべり始めた。

「一平殿の刑事魂で国王父娘暗殺を未然に防げた、腐敗監察官も探し出せた、が警視庁の信頼は薄れたのは言
ずるより明らかなだ、信頼を取り戻すのに何年かかるか某にも分からんが一平殿の刑事魂を以ってすれば時はかからん、
一同宜しく願います」

といい只今を以ってピース国王暗殺阻止本部を解散すると深々と一礼す。

姿勢を正し皆に向き直り副署長を傍に呼んだ。

「管轄外の指示発令は某の一存、自分流だ誰のせいでもない又元刑事でもあるが今は一般人、その一般人を守れなかったのも某の責任だ、これを本庁に届けてくれ」

と警察手帳と拳銃を副署長に渡した。ざわめきが起こる、言い終わるや制帽と上着を脱ぎスタジャンを着、署員の視界から消え去る。

突然の署長の行動に齒を噛みしめる者、皆複雑な表情、女子署員等は涙を流すというか顔がクシヤクシヤに。「誰が引き留めても無理です」

と三鷹署捜査課長、村上裕太郎は言い始めた。

「一平殿が以前こんな事を言った。二十歳代の頃、何の風の吹き回しか小生は採用試験の面接官の一人に任命された、面接も終わりの頃学生服の新井清十郎の番が来た。

筆記試験では不合格点だ、しかし眼が凜としていた、そんな眼を合わせながら一平殿は口頭試問開始、一通り済む、試験管等は互い目くばせし終わりを告げようとした時、学生服姿の新井署長が言い出した。私を落とすと警視庁の損失になりますよ」

一平殿はそれはいかにと問いつた。

「私は市民の安全安心と真実を私流に対峙するものでありその責は他人にはなく私にありです、責が私にあると悟ればすぐさま引き下がります、上官を授かったとしても上下に隔たりなく接するのが私流です」

「その学生服姿の署長の言と凜とした目に引かれた、小生は上官殿に説を申し述べ合格に塗り替えさせた、小生が睨んだ通り悉く事々を処理しつつしか小生を抜き去り署長に収まった」

呼吸を整えるか村上捜査課長は一呼吸入れて話を続ける。

「そんな署長だ、管轄外の捜査を担当した署員には本庁より処分が下されるであろう、がそれは自分が指示を出した故の事、誰のせいでもない、今回の責は自分一人ですと総監に報告は終わっていいよう。

署長の意志は固い、そんな署長をそつと見送ってやって下さい。市民の安全安心と真実の追求に我々があります、署員全員で履行して行こう、それが部下を想う署長へのお礼です」

村上捜査課長の言は終わった、何処からともなく署員等に更なる士気が漂い始めた。

「それは分かれんでもない」

がと副署長が村上捜査課長と声を掛けた。

「捜査課長、何とかならんもんだろうか、皆を見てやってくれ、くしゃくしゃな顔が戻らん」

「こればかりは私にもどうする事も出来ない」

ただあの人ならば可能性はあるしもなかれと課長は口を濁らした。

本庁総務課の職員が総監室に所轄便ですと通いケースを届けた。島原総監はご苦労さんと女子署員に声を掛け徐にケースを開る、全部机の上に広げた。どれも重要書類と想われるがその中の一つを手にとった、表には退職願三鷹署長 新井清十郎と記されている、中を一読し言う。

「ご苦労さん、その責は署長一人ではなくわしにもある。言っても無駄かも知れん、が想い留まってくれんか残り少ない署長職を全うしてくれ。直ぐ三鷹署に戻れ！と言っているんだ」

と言い島原総監は退職願を破いてごみ箱に捨てた。

時同じして、新井署長は庁舎警備官にご苦労さんと声を掛け表通りに消えた。